註、参考文献

一　持田友宏　一九九二　『甲斐国の板碑』二―国中地方の基礎調査―クオリ

二　八田村役場　一九七二　『八田村誌』

三　山梨県教育委員会県史編さん委員会　一九九五　「六地蔵板碑」『山梨県史だより』第一〇号

四　註一に同じ

五　拙稿　二〇〇一　「山梨県の中世石仏―陽刻地蔵板碑を中心として―」羽中田壮雄先生頌寿記念論文集に掲載予定

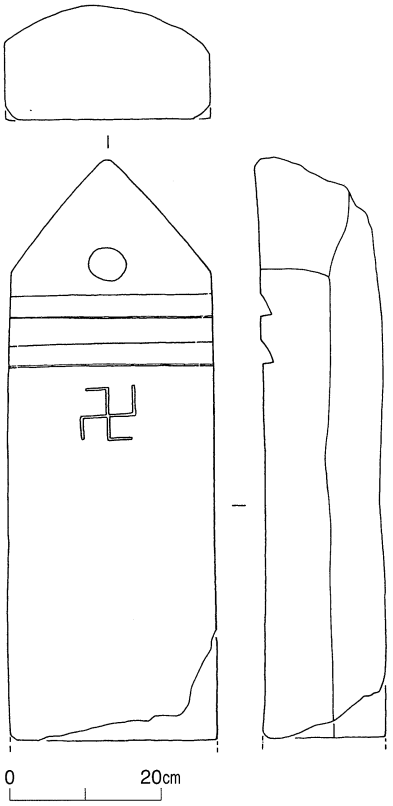
六　山梨県立図書館　一九六八　『甲斐国社紀・寺紀』一～四巻

七　山梨県立美術館　一九九五　『時宗の美術と文芸』

八　濱田　隆　一九九五　「他阿上人（真教）の来甲と中世の時衆寺院」『甲斐路』NO．八二

九　石和町教育委員会　一九八四　『いさわ　路傍の石像物』

十　植松又次　一九七九　『甲斐の石造美術』甲斐新書二　山梨県郷土研究会



第２図　石和町願昌寺所在板碑

やや下方に、直径五センチメートルほどの日輪が、線刻でなく円の内側を総体的に二ミリメートルほど彫り窪めて表現されている。また、二条線の下方に幅三～四ミリメートル、深さ二ミリメートルほどの条線によって「卍」が彫られている。

本板碑は紀年銘がみられず制作年代は分からない。しかし幅広の二条線をもつ板碑は、本県の板碑の変遷過程において、ある程度の限られた期間にみられるものである。すなわち、北巨摩郡下にみられる一四世紀末ころまでのものと確認される名号板碑には、このような湾曲する幅広の二条線をもつものもみられるが、それにはその下方に幅広の額がみられるものである。また、同時期の名号板碑以外の板碑にも、必ずといっていいほど幅広の額が認められる。本板碑にみられるような形状をとる板碑は、次の段階である。すなわち幅広の二条線が顕著に認められる時期であり、月待板碑の須玉町若神子所在板碑（紀年銘なし）、同須玉町仁田平所在板碑（文明七年＝一四七五）、双葉町金剛寺所在板碑（紀年銘なし）、それに地蔵陽刻板碑の敷島町久保所在板碑（永正六年＝一五〇九）などに認められる形態である。このことからすれば本板碑は少なくとも一五世紀末を中心とするもので、下っても一六世紀の初頭の時期とすることが妥当なところであろう。(五)

願昌寺は真言宗智山派で、石和町松本にある大蔵経寺末、本尊が薬師如来であることが分かっているに過ぎず、創建年代については不祥である。(六)願昌寺の所在した付近は笛吹川の氾濫をたびたび受けた所でもあるが、中世の時期には笛吹川は流路を本地域より遥か西側を流れているものであり、願昌寺のある小石和付近は、既に中世の時期の古文書に度々の記述が知られている。また、正応二年（一二九〇）ころに時宗の他阿上人（真教）が、文安三年銘（一四四六）名号板碑の所在する北巨摩郡須玉町長泉寺から東八代郡御坂町称願寺を経て布教のために静岡県へと抜けているが、その経路でかつ時宗の教線に沿った地域であり、信仰はもとより板碑にかかる情報もはるか遡る時期から容易に得ることのできる状況にあった地域と考えられるのである。(七)(八)さらに本板碑の存在する周辺地域には、中世型の六地蔵石幢が小石和（清水寺）、東油川、河内、四日市場といった地域などに比較的多数存在する。(九)また、松本にある願昌寺の本山である大蔵教寺には、中世型の六地蔵石幢の竿様の蓮華文を浮き彫りにしたに台座がある。台座は、台部とその上に単弁で二段葺きの蓮華座を乗せた形態のもので、台座の上面には長方形状の彫り込みがみられる。これから六角形の断面をもつ六地蔵龕をのせるものではなく、板碑などの石塔類をのせるものと断定することができる。このことは、この地域にある程度の板碑などの造立の機運のあったことを物語るものであろう。これらから願昌寺の起源はともかくとして、本板碑が先程の時期に存在しても何ら差し障りない状況下にあったといえるのである。

三　おわりに

中世から近世にかけての石塔、板碑について二例を紹介した。これらはいずれも何らかの形で既に取り上げられているものであり、決して真新しいものではない。また、系統的に整理したものでもない。今回、讀誦塔の図化の作成が終了したのを機会に、過去に図化した板碑の実測図を併せて掲載し、今後の墓石を含めた石塔類の研究の一助となればと考えている。

最後に、資料の図化にあたりご援助、ご教示を賜った長谷寺、その他の方々に厚くお礼申し上げたい。

った沈線は全く確認できない。台座については、一ケ所に集められいるためか、これに合う台座については周囲からは確認できない。背は板碑の形態を残す蒲鉾状で丁寧な造りであるが、やや扁平な嫌いがみられ、また、上部近くに自然面も確認できる。

碑面には次のような銘文が、ごく浅い彫りによって三行に渡って彫られている。

願主権大僧都法印圓祐敬白
奉讃誦大乗妙典一万部成就所
慶長第十五季庚戌四月大吉日

この中で願主圓祐の「祐」については、部首の「ネ」の右に付くものが何なのか若干判別しにくい点がみられる。すなわち、「右」か「谷」のいずれかであるが、実見や拓本からは「右」と見られるようであり、ここでは「祐」と考えておきたい。なお、中央の行の頭には釈迦鉾尼仏を表す「バク」の種子が、また最下段には「吉日」の文字の脇近くから「成就所」の文字の下に入り込むように、幅三ミリメートル、深さ二ミリメートルほどの一条の浅い線が彫られている。

この銘文は願主である同寺院の権大僧都法印圓祐が、大乗妙典（法華経であろう）の一万部讀誦を達成したことを示す記念碑であり、慶長十五年（一六一〇）四月に本石塔の建てられたことが分かる。銘文中の「圓祐」は長谷寺住職の名前であり、『八田村誌』によると、「圓祐」は第六世の住職であることが確認できる。（二）

経文の讀誦関係として最も古いものとして、永正元年（一五〇四）の北巨摩郡須玉町海岸寺所在板碑がある。一千部のお経を読誦した記念で「…読誦於當山一千部経以造立…」と刻されている。（三）さらに、天文五年（一五三六）に建てられた北巨摩郡双葉町妙善寺所在板碑がある。だが、この板碑は「六喩経五千四十八巻、金剛経等」を今後永代にわたって讀誦することを銘文として記したものである。（四）讀誦塔は、一般に仏教修業の一つである経文の讀誦したことなどを後世に伝えるために記録されたものであり、やや趣を異にするものとも思われる。この観点からすれば讀誦塔としては、現在のところ本例がやや間をあけるが県内で二番目に逆上る例と考えられるものである。その後の例としては、長坂町渋沢の寛文九年（一六六九）銘のものが本例に次ぐものであり、本讀誦塔はこれより半世紀以上逆上るものといえる。ちなみに、本県での讀誦塔の造立が盛んになるのは、寛文期以降のことと言えるようであり、盛んになる時期以前のものとして、本例の存在が重要な位置を占めるものと考えられるのである。

次に墓石との関係について考えてみたい。しかし、これは先に述べたように県内における墓石の出現時期、出現過程についての研究が端緒についたばかりであり、未だ多くを語れない状況にあるといえる。この中で県内に残る数少ない江戸時代初期の墓石は、碑面の広いことが特徴の一つとしてあげられるのではないかと思われるが、本例も碑面の広い形態を取るものであり、若干先行する時期のものであるが一脈通ずるところがある。墓石には紀年銘が必ずあるものとは限らない。先行する時期の石塔類の特徴を把握して、その後の墓石を含めた石塔類の復元をするうえで、慶長期の造立である本例は貴重な資料といえるものであろう。

（二）石和町願昌寺（廃寺）の板碑

山梨県東八代郡石和町小石和願昌寺（廃寺）の墓地にあり、これまでの県内における板碑の分布状況からすると、周辺部のやや離れた場所に忽然と所在する感がある。

板碑は安山岩製で、高さ七七センチメートル、幅が上部で二六、六センチメートル、下部で二七、四センチメートル、厚さ一五センチメートルを測り、碑面はほぼ一面に造られ、また背は蒲鉾状の造りである。なお、現在底部と考えている所が、柄の残存が認められず、底部なのか否か明確にできない。

頭部はやや急角度の山形に造られ、その下に幅三、二センチメートルほどの条線を三、四センチメートルほどの間隔をおいて彫って二条線を表している。また、この条線の彫り方は、二等辺三角形状ではなく、片側が長くかつ緩やかな湾曲を呈するものである。なお、この二条線は側面までは及んでいない。頭部の

山梨県における中・近世石塔資料

坂本美夫

一　はじめに
二　資料
三　おわりに

一　はじめに

山梨県内ではこれまでに、中世末から近世初頭にかけての石塔について触れた論稿は極めて少ない。この中で持田友宏氏の「五輪塔を刻んだ板碑」と題する論稿は、戦国末から江戸時代初頭の五輪塔を刻んだ墓石資料を収集、図化し、板碑から墓石への移行について検討を加えたものであり、今後の指針となるべきものである。だが、まだまだ解決しなくてはならない点の多々あることは、併せ指摘されているところでもある。(一)そしてこれは、これまでに確認されている該期の石塔類の数の少ないことに最大の原因があり、その面での資料の蓄積は今後とも必要不可欠といえる。

今回取り上げた資料は、それぞれ性格の異なるものであるが、墓石への移行過程はもとより、板碑研究についても重要な指標となることは間違いないものであろう。また、該期の信仰等の状況を知る上でも貴重な資料となるものといえよう。

二　資料

(一)　八田村長谷寺の讀誦塔

山梨県中巨摩郡八田村榎原にある古刹である。真言宗智山派で、行基が天平年間に大和の長谷寺を模して建立したと伝え、また空海が開創したともいう。創建後の寺歴は未詳であるが、室町期の大永四年(一五二四)に本堂を建立(本堂旧材墨書銘)(国宝)、慶長石高帳には、二石八斗余と寺地三一〇坪の黒印を賜った記載がある。また、境内には中世の時期と考えられる六地蔵幢の屋根、竿なども散見される。

讀誦塔は、安山岩製である。高さ七九、五チセンメートル、幅は中央部付近で三六チセンメートル、基部近くで三二、二チセンメートル、厚さ一四チセンメートルほどである。碑面の中央あたりで僅かに内側に窪む。基部に柄の付く形態であるか否か、明確に確認できない。碑面は、比較的幅広の形態をとるものである。頭部は頭頂部を欠くが、残存部の側線の流れから板碑のような三角形をとらず、弧状の形態をとるものと考えられるものである。頭部をはじめ碑面部に、これとい

第1図　長谷寺在読誦塔